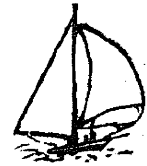

保育精神の團結

――第四回全國連合保育大會を迎えて――

倉橋惣三

保育の全國的總連合が結成せられてから、既に三回の總會と大會とを重ね、近く七月の下旬を以て、その第四回の總會と大會とが盛大に開催されようとしている。開催地も、東京奈良、新潟から、今年の福岡と、地域の普遍を見、更に次々に全國各地に及ぶことになつている。しかもその出席會員は回を重ねると共に擴張せられ、眞に全國連合の實が擧げられている。まことに欣ぶべく賀すべきことである。しかも、全國連合保育會の連合の貴い實質は、幼稚園と保育所とが互に手をとりあい、その設立の官公私立の區別なき一聯の和合をなしている點にある。園長も所長も教諭も保母も、更に保育の研究學者も、賛同協力者も苟も幼兒の保育に責務と關心とを有するものが、一人をも缺くことのできない實員として、これに參加しているのである。盛なりとすべく、大なりというべきである。かくの如き全國連合は、疾くにあるべきであり、以前も時に企畫が試みられたこともあつたのであるが機が熟しなかつたというか、その結成の實現を見得なかつた。それが機熟し實を擧げたのである。將來如何なることがあつても、これが破られてはならぬ。分裂などいうことは素より、連結に聊かの稀薄を來してもならぬ。益々强固に、益々眞實に、充實成長されてゆかなければならぬ。今やその體制にあり趨勢にあり、この希望と確信とを以つて進んでいるのである。元來が、强いて結びついたものでもなくわい〳〵と集つたものでもない。抑も一つである保育精神において一つに大同しているのである。その大同の至當と必須とは、恒常に全面であり不斷に永遠である。

幼稚園と保育所とは、學校教育法と兒童福祉法との別個の法律の下にあるものとして、その使命にも實際にも、おのづから別の存在の理由が法的に認められているものである。その兩立の理由が正當か必要かという論究と意見とは自由であるが、今日の現實としては相共に我國の幼兒の保育を擔いあつているのである。そして、幼稚園は學校教育法の要求している目的の完成に意を注ぎ、保育所は兒童福祉法に基く使命の實現に努力しているのである。そこに經營の實際におのづから異るところも生ずるのであろう。企畫の焦點が必ずしも同一でないこともあるであろう。更に基くところの立法の運營に周到と懇切の缺ける場合もないとはしないであろう。その爲に兩立が對立の姿勢になることもあつたりすると聞く。遺憾のことゝいうよりも短見淺慮の至りである。各々己の立場に熱心なるがためでありとするも、互に共通するところの保育精神そのものにおいては、全然同一であるのではないか。その同一なるところに一致の巾廣い重なりあいがあり、連合の固い結びつきがあるのではないか。個々特有の問題もある。分れて議すべき研究もある。しかし、保育精神の同志としては、一堂に會し、共に憂え、互に欣びたい共同の理解と親近の感情とに、胸を開き手を執りあわずにいられないではないか。

設立の公私の別は、經營の實際において、いうまでもなく同じでない。殊に私立學校法の制定によつて、「私立學校の特性」と「その自主性」が高調せられ、私立の尊嚴が公立に對して、嚴守確立せられているのである。それだけに、その經營者の識見が自由に發揮せられ得ると共に、その責任の負擔は重くならざるを得ない點もある。公立が公共の豫算の下に、經費の依存と他主的規定で經營せられてゆくのと、一歩々々の歩調に揃い難いことも屢々あるであろう。互に理解を妨げる點もたまには起るかも知れない。殊に、從來の非民主的な公主私從的舊觀念と惰性と、私立學校法による私立公共性の新觀念の勃興との間に、調和のずれもあつて對立的氣合の動く場合も或は起るであろう。しかし、そんな經營面や社會面の實際を超えて、保育精神の眞實においては、公立私立に何んの相違もない。若し少しの差でもあつたら許し難いことで、そんなことは決してあり得ない。すなわち保育の本質では公私という名前の上の區別なんか氣にならない程、同一の理想を語り、同一の研究を進めあえるのである。その點では連合というよりも同一である。

全國連合保育會は、保育事業の進展改善のために、あらゆる貢献を努力しているのであり、また當然その事項をも怠つてはならぬのである。衆智により組織により團結により一人一施設の力が出來ないことが可能にもなるのである。しかしそうした研究や運動の方法としてのみの手段的連合に止まるものではあるまい。そうした上の成果も切に希うところであるが、成果の追求だけだと、各自それ〴〵の部面部門に忽に

して、全體の連合そのことの關心と愉悅とを忘れることがないとも限らない。連合の中にも小異小別は免れないからである。しかも保育連合が無からざるを得ないのは、それよりももつと深いところにあるのである。それは保育精神の眞髓を機緣とし中心としての集りなのである。そこにこそ連合の眞の必然があり、純な幸福が滿喫せられるのである。保育上種々の具體的な實際的な重要な成果も亦、その一心一體の欣求と熱心とからこそ生れるのであろう。

全國の連合も、その形態において活動において、年と共に成長を遂げなければならぬ。しかし、常に省みて見失れてならぬことは、保育精神の集結體だということである。

保育精神の連合による大會は、少くとも三つの主要な効果を擧げるであろう。その一は保育精神の昂揚であり、それは先づ會場において更に社會に對し、集團の力が強い働きをする。同じ精神は、共鳴と皷舞とによつて各自の精神に相互に影響し、そこに盛り上り來るものは、內に新に燃え立ち、外に廣く擴がつて、一人や小會合の成し得ざるめざましい効果を擧げる。その二は、保育精神の實現方法の討究であり、敎えあい學びあい、批判しあい訂正しあつて、互が得るところ極めて多いであろう。殊に、苦心の體驗は、單なる机上の研究にまして一つとして貴からざるはなく、疑問は解かれ、獨斷は破られ、深き自得を與えずに居ない。しかも第三は、保育精神そのものゝ自省でなければなるまい。保育も一つの事業である。事業は精神によつて出發し、精神によつて進展するものであるが、時に必ずしも此の純粹な原理を辿ることなく、事業が先きになつて精神が必ずしも伴わず、事業に追われて精神が置き忘られるというようのことも、我れ人ともに遺憾な事實たるを免れ難いことがある。敢て、保育精神の缺如といわない。保育精神の喪失といわないが、その不純と稀薄とは、事業の名と形の蔭に存しないとも限らないのである。保育精神の同業は互に助けあわなくてはならぬ、互に宥しあわなくてはなぬ。しかし、保育精神の嚴たる確立のためには、自ら鋭く批判し正しく戒めなければならぬこともあろう。但し、そういうことを、外部からせられることは心外である。前に敢て自省といつたのはそのためである。

大會がもたらすものは、保育界の進展でなければならぬ。保育界の進展は保育精神の向上によつてのみ行われる。保育精神の向上は個人的にも社會的にも、自他の常時不斷の心掛けであるが、同志集つて專ら保育を議する全國大會は、その大なる機會でなければならぬ。かくして、大會のたびに、我國の保育界は著しい成長を遂げてゆくことこそ、全保育者の期待であり希望である。

但し、大會は其の効果のためのみでもない。そこには、同志相集るあいあいたる和合の樂しみがある。しかも、大會は大會で終るものではない。大會の實は全國連合保育會の恒常永遠の强固と發展を增し加える活素でなければならぬ。九州の今年の大會の大いなる成功を祈る。